

平成 22 年 8 月 5 日

博士論文審査結果報告書

報告番号 医博甲第2141号

学籍番号 0727022021

氏 名 藤田 高史

論文審査員

主 査(教授) 染矢富士子

副 査(教授) 清水 順市

副 査(教授) 能登谷 晶子



論文題名 : Development and review of the validity of an “instrumental activities of daily living test” (IADL test) performed as a desk evaluation of patients with Alzheimer’s type of dementia

論文審査結果 :

近年認知症予防・支援の観点から、初期段階のアルツハイマー型認知症（ATD）の記憶、注意、遂行機能の評価と介入が注目されている。遂行機能の評価には、手段的日常生活活動（IADL）で評価するが、IADL スケールは質問表形式が多く、直接対象者に施行可能で簡便かつ質的に評価可能なものはない。本研究では机上で実施可能な IADL 評価方法（机上 IADL 検査）の開発を試み、その妥当性と特徴について検討した。「対象と方法」健常群 24 名（MMSE 28.9 ± 1.4 ）と ATD 群 21 名（MMSE 19.8 ± 4.4 ）とした。机上 IADL 検査の課題は、電気ポットでお湯を沸かす、お湯が沸いたらコンセントを抜くなどの IADL の課題を 9 つ設定した。得点化は、各課題の適切・不適切行動と検査実施時間、実施順序とした。本検査法の妥当性検討のために、IADL Scale と Fenchay Activities Index (FAI) を実施し、机上 IADL 検査得点との相関係数を求めた。また、机上 IADL 検査に影響する因子を検討するため、各神経心理学的検査と高齢者うつスケール短縮版を実施し、これらと年齢、性別を変数としてステップワイズ重回帰分析を実施した。「結果」机上 IADL 検査得点と IADL Scale, FAI の間には、ともに強い相関を認め、重回帰分析では、机上 IADL 検査得点に対し「遂行機能症候群の行動評価」他 3 検査で高い寄与率（ $R^2=0.84$ ）を示した。また適切行動の出現数や効率の良い実施パターンも健常群が有意に ATD 群より高かった。「考察と結論」机上 IADL 検査は、軽度 ATD 者の症状を反映した IADL 能力を評価している検査であり、行動評価よりも IADL Scale との相関が高く有用と考えた。さらに、本検査は適切・不適切行動や実施順序を検討することが可能で、健常者と ATD 者の行動の違いを質的に捉えることができ、IADL 評価スケールには無い特徴があると考えた。「審査結果」本検査法は質問紙法にはない、認知症者の質的検討も評価可能で、具体的にリハビリの介入計画を作成できる点で実用的である。以上より、本研究は博士（保健学）の学位を授与するに値すると評価する。